

新たな海辺の 文化創造の理念



新たな演習の文化創造の理念

古来より人々は、海辺とつながりのある生活を送ることで、海辺より精神の豊かさ、生活の豊かさを楽しみ、地域の固有の文化を創造してきました。海辺は、元来、神事等の舞台となる神聖な場であることが多く、文化の創造につながる心の豊かさを増幅させる空間を担ってきました。これは、海辺が、時には自然の脅威を目の当たりにし、畏れを感じる場であると同時に、自然の恵みを受け、人間性を回復させる場として人々の生活と密接な関係にあったことによるのではないのでしょうか。

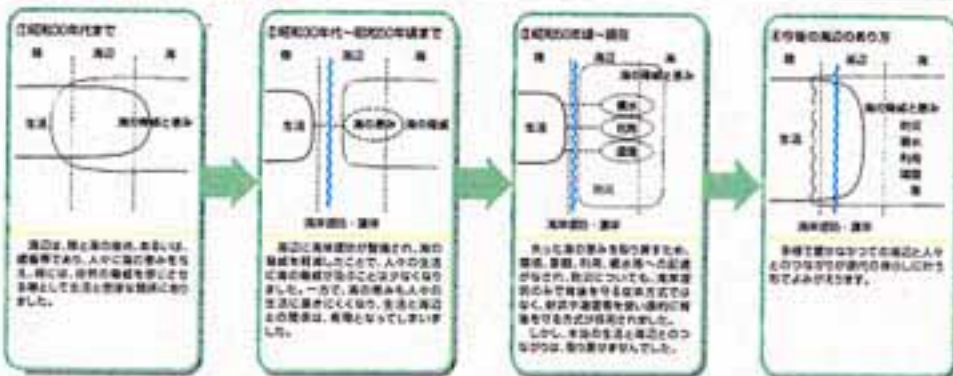
しかし、昭和30年代から進められた、海の資源を取り除くことを優先した整備のために、その意みをも除かれてしまい、海辺は人々から意識され難い空間となってしまう。その後、海の恵みである潮水、利用、環境、豊饒

といった要素を考慮した海記づくりが求められてきましたが、不足した機能を施設整備によって付加する方法では、従来のように人々の生活に海記が密接な関わりをもつまでには至っていません。

心の豊かさを求める国代であるからこそ、荒々しさと優しく、骨髄と思いを合わせ持つ海辺の価値を再認識し、海辺と人々の本当のつながりを回復することが必要です。

多くの人々が、海辺を訪れ、憩い、癒され、学び、調べ、教え、楽しむことによって、地域の人々がその地域の海辺に愛着を持つことができ、その海辺をかけがえのない地域の共有空間（コモンズ（注））として意識することができるのではないのでしょうか。

人々の生活と環境との関係の究明



○ (注) 共有空間 (コモンズ) について

コモンズという言葉は、「入会地」という意味です。元々、入会地は、その土地の所有権及びその土地で何らかの行為をする権利を地域の人々が共有することを意味する場合が多いようです。

しかし、ここで使っているコモンズは、入会地のように共同所有権のある空間ではなく、人々の意識としての共有空間を意味しています。人々が、周辺を歩くの楽しみを受ける自分たちの共有空間のように意識し、その維持、保全に高い関心を持つべきとの意味をこめ、共有空間としての海辺をコモンズと称しています。

新たな海辺の文化創造の 具体的なイメージ

現在、海辺の利用は、海水浴に偏重しており、利用される時間も限られています。このため、人と海辺の関わり合いが単調となり、海辺を楽しみ、大切にすることを人々に忘れさせてしまうとともに、海辺の環境悪化や魅力低下をもたらすことも懸念されます。

これに対し、目指すべき海辺づくりの姿は、自然、歴史文化などの観点からの人と海辺の関わり合いの密接化や、環境教育、海辺の教養、ビーチスポーツ、マリンスポーツ、文化活動など、関わりや利用の多様化を進めることによって実現されるものです。

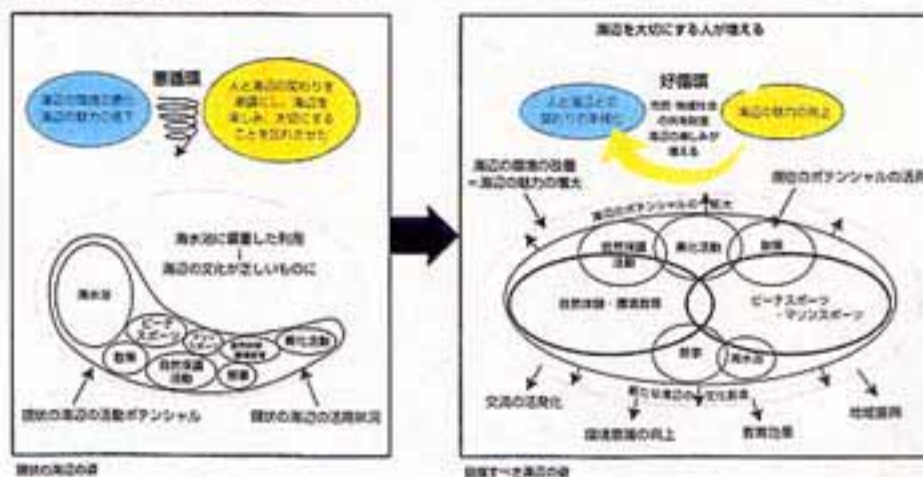
このような取り組みによって、海辺の魅力が向上し、海辺の環境も改善され、海辺を大切にする人々が更に増えるなどの好循環が期待されます。

私たちは、新たな海辺の文化創造とは、海辺において多様な活動が行われ、地域の人々と海辺との相互かつ密接なつながりを形成していくことがと求めています。

新たな海苔の文化創造の考え方



新たな海沿いの文化創造の具体的なイメージ



新たな海辺の文化を創造するために

里浜づくりを進めよう！

「里浜づくり研究会」では、海辺と地域の人々との関係のあり方、密接なつながりの回復に向けた取り組みの方向性などについて、検討を進めてきました。

この結果、同研究会において、「里浜」を培い、育て、つくりだしていく運動や様々な取り組みとして、「里浜づくり」の推進が宣言されたところだ。

国土交通省としても、この宣言を真摯に受け止め、人々と海辺とのつながりを深め、「里浜づくり」を進めるためのソフト面、ハード面両面の各種取り組みを進めて参ります。

里浜とは？

里浜は、一言で言えば「昔ながらの海辺」である。多様な豊かな「海辺と人々のつながり」を現代の暮らしにかなう形で蘇らせた海のことだ。

一言で現在では、海辺の趣相も人々の生活様式も変わっています。現在や今後の海辺と人々のつながりは、かつてのものとは異なる面があり、海辺の自然環境の保全・再生、ビーチスポーツなどによる海辺の利用などについても踏まえながら、現代の暮らしにかなう形で新たに海辺を蘇らせる必要があります。



里山と里浜について

「里山」は、農村生活と深い関わりを持ちながら、人々の手により管理されることで、多様な機能が一体的に長い年月にわたって維持されてきました。昨今、豊かな身近な自然としての価値が見直され、里山を保全・管理する市民運動が盛んになっており、里山と人々の新しいつながりが生まれています。人々との新しいつながりが生まれた山の辺が「里山」であることを踏まえ、私たちは、人々との新しいつながりを生み出す海辺を「里浜」と称しています。

里浜づくりを進めよう！

現在、海辺の利用は、海水浴に偏重しており、利用される時間も限られています。このため、人と海辺の関わり合いが単調となり、海辺を楽しみ、大切にすることを人々に忘れさせてしまうとともに、海辺の環境悪化や魅力低下をもたらすことも懸念されます。

これに対し、目指すべき海辺づくりの姿は、自然、歴史文化などの観点からの人と海辺の関わり合いの密接化や、環境教育、海辺の散策、ビーチスポーツ、マリンスポーツ、

文化活動など、関わりや利用の多様化を進めることによって実現されるものです。

このような取り組みによって、海辺の魅力が向上し、海辺の環境も改善され、海辺を大切に人々が更に増えるなどの好循環が期待されます。

私たちは、新たな海辺の文化創造とは、海辺において多様な活動が行われ、地域の人々と海辺との自立かつ密接なつながりを形成していくことだと考えています。

関係する主体の協働作業のイメージ



里浜づくりの進め方の段階イメージ

里浜づくりには、大きく3つの段階があると考えられます。1)「現状の把握」の段階。2)「目指すべき里浜像の検討」の段階。3)「里浜像を実現する手段を考え・実践する」段階です。



「里浜づくり」の始まり



山が美しい「里浜づくり」の始まり（静岡県伊豆市）



近々浜づくりが完了した海岸（静岡県伊豆市）



近々浜づくりが完了した海岸（静岡県伊豆市）



近々浜づくりが完了した海岸（静岡県伊豆市）

「里山」と「里浜」

この特集のキーワードである「里山」という言葉は造語です。他方で、「里山」という言葉はすでに一般的に使われています。山があり、森があり、そこに里落があって、人々が山や木を利用しながら、山の手入れをして守っている。そういういい関係を持った山のことを里山と言っているわけです。私たちは、海辺と人にも似たような関係があるはずだと考えました。そしてそれを「里浜」と名付けました。昔は海辺の中で人が暮らし、そして人の暮らしの中に海辺が息づいていました。海に行くと貝を拾い、海藻を採り、地引き網を引いて魚を捕る。夕方になると獲れた身体を休めるために海辺にで

海辺にあたる。そういう生活がありました。

海岸災害と防波

しかし、同時にそれは様々な危険性も含んでいました。特に、戦後を前後して東南海地震津波と南海地震津波、そして地球の反対側からやってきたチリ地震津波にも襲われました。また、13号台風（1953年）や伊勢湾台風による高潮も大きな被害をもたらしました。このような状況を背景として、1956年には海岸法が制定されています。したがって、海岸法の目的は、とにかく日本の海岸を安全にしよう、海岸を災害から防護しようということになりました。そして、津波、高潮、高

浪、海岸侵食などから海岸を防護するために、護岸や堤防などの海岸保全施設ができるかぎりのスピードで建設されてきました。これにより、海岸の安全性は格段に高まり、台風が来ても以前に比べればずいぶん安心して暮らせるようになりました。

海岸の防護の結果として何が起ったかを考えてみると、人の暮らしと海辺がどうも遠くなってしまったようだということがあるかと思えます。護岸

や堤防は、人に対しても生き物に対しても、陸と海を切り離すということになります。また、干潟に対して視ては、海は危険だから近づいてはいけないという言い方をすることがしばしばあると思います。いわば、三十六計逃げるに如かずということで、危ないところは切り離して近づかない方がいい。それによって、海岸のいろいろな災害から安全になってきたという側面があるのだと思います。また、それと前後して海辺の自然の質も低下しています。昔は広い砂浜であったのに、侵食されて狭くなってしまった。生き物が少なくなったというようなことが起きています。

「里浜づくり」へ

思い直してみると、安全に暮らせるだけというのは、人の生活としては寂しいものです。動物園の動物は檻の中で安全に暮らしていますが、それだけでは豊かな生活とは言えないのではないのでしょうか。人の生活は陸上が中心だけれども、たまには海に出て行って海の風にあたる。泳いでみる。海の生き物を観察してみる。眺めてみる。そういう生活の思いがけによって、私たちは豊かに生きていくことができるのではないのでしょうか。海辺を生活に取り込んでいくことが必要なのではないのでしょうか。これを実現しようというのが里浜づくりです。1999年には海岸法が改正され、目的が海岸を防護するだけでなく、環境を保全し、適正な利

用を図ることが付け加えられています。こういうことを受けて、私たちの生活に海岸を取り入れ、私たちの活動の場を多様なものにしていく。いろいろな生活の場を創り出していく。それを通じて豊かな生活を創り出していく。これが里浜づくりです。

「里浜づくり」の立ち上げ

このような里浜づくりは市民が主体となって進めなければなりません。環境物による防護であれば、専門家設計し、建設して、安全性をある程度確保することができます。しかし、生活の中に海辺を取り入れるというのは、生活者としての市民が主体とならなければなりません。その上で、海辺に生活し海をよく知る漁業者、実地に向けての情報や資源を提供する行政、様々な知識を持った専門家など、あらゆる関係者を含めて協働作業を進める必要があります。これが里浜づくりの大きな特徴です。

では目指す「里浜」とはどのようなものかと言うことですが、それは固定した概念ではなく、イメージとして「人々が海辺を訪れ、憩い、遊ばれ、



子どもたちが遊ぶビーチ（静岡県伊豆市）

学び、遊び、教養、楽しみ、その結果として地域の文化が育まれる」というようなことが挙げられます。具体的に画一的な規定にはならないのです。ただし、共通して言えることは、あるべきところにあるべきものがあるという意味でアメニティの高い海辺にしていこうということでしょう。海辺には、自然の美しい砂浜もあれば、多くの生き物の住む干潟もあり、また荒波にもまれてできる磯場もあります。美しい岩石海岸も、またエメラルドグリーンの水の色を演出するサンゴ海岸もあります。それぞれの海辺の基本的な特徴を正しく認識した上で、自然環境・生態系を保全し、海辺の安全性を向上し、賢く利用していくことが「里浜づくり」であると言えます。

私たちは、「里浜づくり」について、その内容や進め方について議論を重ねてきました。今後も議論を続けながら情報を発信し、「里浜づくり」が生まれ育っていくように願っています。



津波に対する注意を促す看板（静岡県伊豆市）



海辺の整備が完了した海岸（静岡県伊豆市）



海辺の整備が完了した海岸（静岡県伊豆市）

「里浜づくり」の目指すもの

海岸法の改正は、新たな潮流となって海辺の文化を創造（里浜づくり）する契機となった。それはまさに、従来の海岸行政におけるコペルニクス的転回が図られるという画期的な意味を有している。海岸管理のコペルニクス的転回とは、これまでの行政を中心とした海岸防衛一辺倒であった管理思想が、海岸環境の整備及び保全と海辺における公共の適正な利用の二つの項目が追加されたことにより、地域住民の参加が求められるようになったことである。すなわち、市民、行政、専門家の協働（パートナーシップ）により、人と海辺のかかわりを深め、それぞれの地域の特性を活かした「海辺の文化」を創造（＝里浜づくり）することの必要性が社会的に認知されはじめたことである。そこで、今後の里浜づくりの目指す方向性について考えてみよう。

365日

これまで、海辺利用の定常は海水浴と日光浴であった。その開設期間は7月から8月までの約1ヵ月半で、各イベントもこの開設期間に多く開催されてきた。これ以外の期間は、海辺住民が数集する場であり、一部の愛好家のスポーツカイト、サーフィン、ウインドサーフィンなどを享受する場である。しかし、沖縄県を除くとそれは過半数利用されているものではない。多くの人々が地域の海辺に愛着をもって接しているが、昔とは地域の住民

の生活の一部になってはいないのが現状であろう。かつて、海辺は魚介類の採取の場であると共に支那や人々の交流の場であり、同時にそれらの密みに感謝する祭祀の「ハレ」の場でもあった。海辺が住民と距離した空間には、時代に対応した我々のライフスタイルの変化と、海岸法という法律のあり方にも責任があると問われる。海辺を有する自治体の多くは、この海辺空間を地元の資源と位置づけているが、その資源をどのように活かすかという明確なコンセプト（政策）を有していないのが現状である。その背景には、海辺の利用が極めて夏季限定と、自治体が自ら規定しているところに問題があると思われる。自治体が開閉する海辺の利用のあり方は、多くの人が集うという活気のあるイメージである。すなわち、夏季限定ではなく、1年（365日）を通して活用できる海辺を期待しており、ひいては、地域経済に貢献する海辺の利用方法である。

ビーチスポーツ

各自治体が期待する365日活用できる海辺のあり方として、ビーチスポーツが期待されている。ビーチスポーツは決して特殊なスポーツの形態ではない。従来のスポーツをビーチという環境に適合させて、ルールを変更したものではない。ビーチスポーツと言われるものには、バレーボール、フットサル、スノー・オン・

スノーなどがある。これらに通ずるものは、基本的には球技であり、しかも、使用する球は海岸風には飛ばされない質量（重さ）を有するものである。その他、ライフセイバーの訓練から派生したゲームが、一般の人々にも人気を得るようになってきている。その代表的なゲームがビーチフラッグである。これらのスポーツやゲームは、全国で注目され、各地でイベントが開催されるようになってきている。特にビーチバレーは、オリンピックの競技に採用されてからの普及が見え、また、ライフセイバーが夏季の海水浴場の監視を委託されているところでは、彼らが中心となって海岸清掃、子供たちへの海軍思想の普及や、美しい海辺の利用について講習を行っている例が多く見受けられる。ビーチスポーツは、基本的にいつでも誰しもが容易に参加でき、ボールさえあれば人数でどこでもプレーを楽しむことができるものである。このビーチスポーツの普及が新たな海辺の文化を育む契機となることは確かである。すなわち、自治体が希求していた365日活用できる海辺で、多くの人々が集い楽しむ、かつ運用の仕方で経済波及効果が期待できるものである。

ビーチクラブ

ビーチスポーツが海辺の文化の新たな創り手であり、地域活性化を助長するシステムに発展させるためには、中核とな



アサヒスノーボード



車椅子による海辺散歩



海の中に入り、魚が観察できる

り求心力のある組織形成及びその運営のあり方が求められる。一般的には、地域に根ざした地域住民が主体となるボランティアのグループやNPO（非営利活動法人）が望ましいであろう。そのような組織を以てビーチクラブと呼称すると、ビーチクラブの役割はビーチの様々な活動を助長するプログラムの作成及びビーチスポーツの開催及び普及活動、各地のビーチクラブとの交流促進、利用者が安全に快適に利用できるビーチの環境整備（ビーチ清掃や活動空間の整備）などがあげられる。このような組織は既に事例があり、地域自治体と協働で活動しているものがある。その代表的な事例として、神奈川県が主催したサーフ90の時に整備された平塚の海辺には、年間を通して利用できる湘南ひらつかビーチセンターがあり、情報プラザ、事務所、売店、更衣室、トイレ（バリアフリー）がある。また、ボードウォークも整備されており、その周囲にビーチバレーコートが複数整備されている。その運営を住民主体のボランティアグループが行っている。ちなみに、バレーボールは無料で貸し出されている。日本で最も早くバリアフリービーチを志向した茨城県の大洗サンビーチでは、子供たちの水辺の活動を支援するグループがボランティアを組織し、ライフセイバーなどと協力して様々な海辺の活動を行っている。サンビーチではビーチバレーはもちろんのこと。ビーチセトクロスなども開催している。最近の動向としては、大洗町が中心となって地域の各種団体を統括するビーチクラブであるNPO海辺の大学を創設した。これらの事例に通ずることは、ビーチクラブの活動が地域に根ざし、地域住民の発意による新たな海辺の文化創造を企図し、長年におわたり継続して活動しつつ地域住民を巻き込みながら、子供たちが地元の海辺に対しての夢と希望と誇りをも

つような活動内容となっていることである。

ユニバーサル

ビーチを周年、誰もが安心して、快適に、楽しみむためには、ビーチがユニバーサルに整備されていなければならない。ユニバーサルの概念の中には、アクセシビリティ（近づきやすさ）、マナー・ベリタビリティ（振作のしやすさ）、セビリティ（移動のしやすさ）などが含まれている。今年の8月2日、新潟県海辺においてユニバーサルコーストというイベントが、NPOユニバーサル社会工学研究会と地元NPOとの協力し、北陸地方整備局新潟港・空港整備事務所の協賛を得て開催された。今回のイベントは、年齢や障害の有無にかかわらず、誰でもが平等に安全、快適に利用できる美しい海辺づくりを推進していくための社会実験として行われたものである。このような試みはバウンティイェットの車椅子（ランディーズ）を用いて大洗サンビーチでも行われている。ちなみに、大洗サンビーチはNPOユニバーサル社会工学研究会主催の第1回水辺のユニバーサルデザイン大賞に輝いている。今回の新潟県海辺の社会実験では、後述から前記までのアクセシビリティを考慮して、砂浜上にシタ工費削減のゴムマットを敷いて、車椅子でも打ち上げや第一着の先陣までいけるようにしたことが特徴であった。また、身障者や高齢者でも安心、安全、容易に移動できるコット（アクセシビリティ）やカヌー、クルーザー、ランディーズでビーチや海の活動を楽しんでもらった。また、移動組も立てが容易な簡易トイレを沖浜北谷町まで運ぶ（簡易の古語で「おしり」の意）の習志さんが、遠く沖浜から運んでくれるなど、実に幅広いボランティアの人々の多くの参加と支援があり、社会実験は成功したと思われる。ビ

ーチや海は、障害者には気がつかない多くのバリア（障壁や障壁）があり、精神的、物理的に人々を容易に近づける障壁とはなっていない。その意味で、ビーチが親近となるためにはユニバーサルな環境整備が急務となるであろう。

「里浜づくり」の立ち上げのために

里浜づくりでの目指すべき姿の模範のキーワードとしてブランディングという言葉をあげた。ブランディングとは、かつて区別するという意味であったが、現代的な意味では「好ましいイメージ・評価を構築すること、競争優位をもちたす価値のものを」となっている。ブランディングとはブランディング化することであり、ビーチのブランディングとは地域との競争優位をどのように創出するかということである。海辺、湘南海辺という言葉は圧倒的な強いブランド力を有している。知名度が高く、訪れたいという誘発効果があり、その名称を使用したいという強い憧れを有している。このように誰もが憧れ、訪れたい。そこで選んでみたい。その名称のグッズを身につけてみたい。人に自慢してみたいというビーチのブランディングが重要な戦略となる。その意味で、里浜づくりの戦略には、時代に対応した利用のプログラム作成及び訪れた人々を魅了するオスビティティ、誘致を期待させる魅力の創出などが重要な課題となる。ビーチスポーツが周年利用可能なプログラムの一つであることは確かである。しかし、全国津々浦々同じようなプログラムでは、情報伝達力や人口圧力を有するビーチに負けてしまうことになる。新たな海辺の文化を創造するためにも、個性的で分かれやすい魅力的なブランディングを検討しなければならないであろう。（新潟県・北陸地方整備局新潟港・空港整備事務所）



ゴムマット敷き海辺散歩



ビーチバレー



ライフセービング

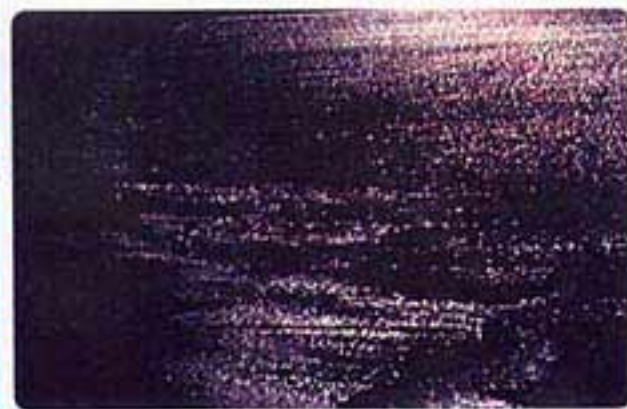
「里浜づくり」の意義と課題

東京工業大学大学院教授 高橋 剛 (Takashi Takahashi)

はじめに

数年前のことになるが、ある地方の小都市で里浜について講演する機会が与えられた。その前日、丘陵に囲まれた当地の海岸に立つて、天然の美しい磯場を見ながら漁師の駐当者といふ人々と話をし、そこが漁師の生活の根拠地であることが分かった。その人が市の職員だったか、県の職員だったか忘れてしまったが、地元出身者のようだった。そして、この磯場では子供の頃に遊んだり魚をとったり、よく遊んだものだといふ思い出を語りながら、残念だけれども職業上は里浜を推進しなくてはならないのだと、彼は複雑な表情をわたしに見せたのである。

この国は、高度経済成長期のあのがむしゃらな国土開発の能力を、未だに誇ることができる。こんな美しい海岸でも、きわめて短期の経済的見通しで埋め立てた方が得なら、そうすべきだと考えている。その仕事に現場でたずさわっている人の中には、複雑な心境をかたがけで、計画を実行する者がいる。これはいったい、なるといふ国なのだといふところにわたしはとらわれた。



12 Mavek Beach

どことも悲しい目をして苦笑するその顔が目に焼きついているのを覚えている。こうした悲しい目をする行政担当者もいる。まだ可能性があるのかも知れないとも思ったのである。

海岸改造

工場建設のための海岸埋立は従来に比べれば格段に少なくなったと言えるだろう。今は、遊休地化した埋立地をどうするかで関係者が頭を悩ませているほどである。しかし、一方で海岸改造のエネルギーは依然としてあり続け、そして、その真の理由についてはここでは触れて置きたい。

さて、海岸改造の目的はいろいろあるだろうが、海岸防護はその中でも最も説得力があるもののように思われる。背後に住む人々の生命と財産を海難から守るという要請自体をいさかい否定する理由はない。この海岸防護は高潮堤による一線防護から防波堤、あわせて海岸生態系や遊歩道、海岸利用にも配慮したものへとシフトする機運があるのだから、その事業推進に賛同者などないようには思われる。

事業化の罫

しかし、問題はその後になる。国が新しい事業コンセプトを打ち出すと、地方では地元固有の問題を丁寧に積み上げて独自の解決策を工夫することもある。すでに国の事業推進に賛同する傾向があるからである。

たとえば、沿岸防護については、地元水産が強くても深くても、概ねそれに沿ってやりかねない側がある。水産が強い地域で、高潮に対して一定の効果をあげた場合には、漁民の人工リーフや遊歩道、遊歩道では対応できない。しかし、多少無理をしてもやるべきだ。高潮の造成や市民利用のための磯場づくりにつなげるから、という主張が事業を後押しする。自然を活かすとか、自然との共生というなら、地元水産が強いという自然状況を安易に改造せず、その環境に応じた住まい方や土地利用のあり方、公園・緑地の防災機能をもあわせて整備すべきなのだ。けれども当面事業的な支援体制があるのは高潮だけだという理由で、海岸を大幅に改造する方向に話が進むのである。国がいったん画期的防護を打ち出すと、地元の状況に応じて当面は一線だけでいいという選択が、あたかも時代遅れであるかのように自動的に排除されてしまう。

海岸防護にからんだ生物多様性の推進が事業ベースで肯定されると、砂浜にも磯場を作れ、ということになる。生物多様性とはそんな局所的な小規模の次元ではなく、もっと広域的視野で語らなければならない。それを問うと、今度は子供の自然観察の場としても磯場を提供すべきだということになる。人工的にセッティングされた観察用磯場で、何が自然教育なのだといふことは思うのだが、子供の教育という理由は今や人工里浜づくりの免罪符になっている。同じ地域の別の海岸に天然の磯場が存在しても、事業対象範囲には新たに人工磯場が要求され、地元の行政もまたそれに応えようとする。

砂浜は誰だって歩きづらく、砂浜である限りそれは当たり前のことなのだが、このことが事実上受け入れられない。地元では利用面で配慮するという理由で砂浜に遊歩道をつくりたがるし、多目的広場と称するあんなハードで無骨な空間をなぜわざわざ砂浜に持ち込むのだという疑問にも耳を貸さない。行政も地元の人々が楽しめるならそれでよいではないかというのである。海岸に多目的広場がなかった昔の人は、さぞかし不幸だったとでも言いたげである。

海岸アクセス対策では階段護岸一辺倒である。階段は要所に設けるからこそアクセスに変化や刺激がでる。階段自体もきれいに敷き詰めという「専門的」見解は無視される。どこでも降りられ、どこでも上れるから便利だということである。そうして、後浜と前浜と護岸の落差が大きい海岸では、階段護岸は基盤として無骨な構造物になるというのに、他の方法を関係する工夫をしない。階段護岸なら事業補助の負担として国に無条件で受け入れられるが、独自の工夫だと認められにくい。というのが本音である。そうして規模が大きくて御機嫌なならぬでも雨ばかりではないかといふことになる。そういった人為的「真実」は、素人仕事であろうと、プロの建築家の手になろうと、他人の趣味や価値観から通って海岸の自然に向き合おうとする人々にとっては押しつけがましいノイズになるのだということには思い至らない。

海岸とは何か

なぜ、海岸をごく普通の海岸にとどめることに、事業的な関心の向けられないのだろうか。もちろん、高度経済成長期以降に手が付けられなかった海岸には見えないものが多いから、そのまま放置しておけばよいものばかりではない。それらをあきらめてきちんとつくりなおす責任はわれわれの世代にあるだろうと思う。

しかし、言うまでもなく、海岸は土地ごとに異なっている。ひとつとして同じ海岸はないと同時に、その土地によって、地形や海岸線によって昔からそうあるべくしてそうになっている。その土地の普通が、他の土地にとっては普通ではないのである。その土地の普通が何かを

見いださなければならない。その土地の普通こそが風景になるものではないか。

これをきき通して、海岸を誰の目にも個性的に見えるように提供しようとする。そしてそれこそが里浜計画だと感じる者もいる。あるいはそう感じないまでも地元活性化に役立つかと感じる人がいる。里浜を経済活性化と直接結びつけようすると、里浜は往々にして商品になる。そして数年後にはそれが陳腐化し、お荷物となる。

歩きにくいのは海岸ならばこそである。海岸は都市空間ではない。作画的な情報で観望する都市から離れて、たまには静かに自分を見つめたいから海岸に来る人も少なくない。ところがそんな人々の気持ちに寄り添うという主張が事実上、支持される。歩きやすくなること、オプショナルでいい、イベント広場をつくれという其の意。海岸が海岸たることを認めない。彼が死んで逃げない海岸なら、逃げないように人為的に改造すればよいではないかと主張する人々がいる。その土地の海岸がその土地の海岸であり続けることを認めない。

「里浜づくり」

現代は、精神的な豊かさを求める時代とされている。その同じ時代に、自分たちの欲望のおもむきままに、自然環境を改造することが支持されている。国に事業的なバックアップ体制がある限り、自治体は補助金を求めてその体制にすぐに乗ろうとする。海岸は本来どのようにあるべきなのか、そのために地元ではどう動いたらよいのかを問おうとしない。議員がある限り、必要のない場所でも埋め立てて使わなければならない。そういう風なことを海岸に対して続ける土壌はまだあるのである。

本当にそんなことでよいのか、海岸のありようについて地元を巻き込んでじっくりと問う機会こそ必要ではないか、というのが「里浜づくり」の基本的思想である。これは、これが本物なら、実に画期的なことなのである。

だからこそ、上で述べたようなことは、

意義と課題

地元で徹底的に議論されなければならない。行政は、国を、住民の意見を聞きながら事業推進の方向性にはならない。住民はお客さんではなく主体の一員を担っているのである。行政として海岸整備の理念があるならそれを提示して、住民と真正面から向き合い、双方納得いくまで話し合えるべきである。権利を主張する人々の方、それでは自己責任をどうのようによって、実現するつもりなのか、と逆に糾弾しなくてはならない場面もあろう。国とは本来、そういうことなのだ。

と同時に、地元住民も、これを機会に見直した海岸をもう一度じっくり見直し、研究してほしい。長い歴史をもつてほしい。見直すためのきっかけが必要だと言うなら、わたしどもが手伝いたい。地元の普通をしっかりと見つめ、そこから意見を引き出すのは里浜の専門家の仕事である。小泉首相が里浜立国を掲げているけれども、気をつけて欲しい。最大の財産は、素人臭いソニーメントや官能性などの施設は立派ではなくて、土地固有の自然だということ。そして、それは本当に持続可能なものだ。

建前では、海岸といえども里浜をとりまとめる専門家がきちんと仕事ができる体制になっているけれども、わが国では、行政は里浜の専門家を本音の意味では信用していない。里浜は個人的な趣味の問題だから、専門性なんて必要ないといふのが事業担当者や政治家の口癖である。そして、結局この国の海岸では、自己責任の押し付けと責任のすり替えというイデオロギイが横行したり、里浜教育もデザインされた後継者でもない技術者が事にあたることが多々あり続けているのである。これはあまりに無責任に過ぎるではないか。

地元の海岸の理想を徹底的に検討しあおう。まずその機会を待とうという「里浜づくり」が、上に述べた従来の路線から脱却できないのであれば、結局は放棄されなかったことと同じことになってしまう。わたしとしては、それはあまりにも無念である。今から、責務に追いついてほしいのである。

東京大学大学院 総合文化研究科 清野龍子

「皇親」は、地域にとっての海岸とは何かを見直すきっかけだと思います。県政づくり研究会では、海岸と人間の間隔が議論されています。これを機会に海岸政策の理念の議論や構造物のあり方の本格的な見直しが行われ、従来のように規格化された構造物がどんどんできる状況は少しは変わるのではないかと期待します。

とはい、こういった理念に満ちた政策の、実際の海岸の現場での展開は、地域の企画力やアイデアの選択、意思決定に委ねられるので、楽しみでもあり、不思議なものができる可能性もあります。いずれにしても、日本の海岸整備にとっては、ギアチェンジであることは確かです。

里話は、基本的には地域主体の活動です。私のような研究者は、地域にとっては訪問者です。地域の人達との出会いによって大きな発見と感動があります。また、訪問者が感動している様子から、地域には昔からあつて当たり前ものの素晴らしさを、地元が再発見する、という相互作用も生まれます。ここでは、一例をご紹介します。

● 地元には当たり前の生物が
実は大切なものだった

1999年秋、大分県中津市高。日本の内海生態系の最後の楽園といわれていて、生きている化石のカブトガニ、殻の魚アオゴシ、イルカの仲間のスナメリなど希少生物が生息している海域のことです。埋湾施設の拡張に伴う生息地の影響評価のための検討会がありました。

カブトガニが生息するような海は、それだけでも地域の重要な財産なのですが、地元では、干潟で育はたくさん居て最近では減ってしまった生物、という程度の認識でした。日本は科学が発達しているにも関わらず、どこの海岸にどういふ生物が居るのかの基礎的な環境データがおそろしくお粗末なのです。地元ではカブトガニは当たり前の存在だったのです。

しかし、わざわざ環境調査をしたり、研究者が来たり、そんなに移しものなのかと地元の方が驚いて、研究者に様々な情報を寄せてくださいました。カブトガニの雌雄の形態の違いや、干潟のどこに居るかなどのはか、干潟と自分の人生についてのお話もいただきました。

震災後に里浜が
商を営ってくれた

その中で印象的だったのは、「自分が今日生きているのは千歳のおかげです。戦戦後に大陸から命からがら引き離れてきて、中津の千歳に面した海印でバラック生活をしていました。ゼロからの生活で、子供も母も千歳で目を醒めて暮らしていました。自分たちが食べるだけでなく、町の人に買ってもらったりなどで細々と現金収入がありました。軍の周りには一面の良田の山が出現しており、それが燃み固められて飼料代わりになっていました。良田の地で鶏を飼って、肉をたっぷり美味しく料理して子供が売りに行きました。大勢の引越者の人達が千歳の周りに住み着いていましたが、その命を救ったのは千歳の生き物の豊かさです。です

ら、早取って干渉に何か進展をしたいと思っています。ということなのです。

私はそれまでは、干潟の環境を生物・生態系という点から見ていたので、人生のなかでの干潟の恩恵ということで、感動してしまいました。それ以来、各地の干潟を調査で訪れると、終戦後の食糧難の時代に、干潟や海岸が地域にとって何であったかをお年寄りから尋ねています。

すると、震災でぼろぼろになった沖縄でも、また、東京大空襲で下町から焼け出された人たちが住み着いた千葉の行徳や船橋でも、同様の姿があったのです。この数年、にわかに戦争の危機を感じる時代になってしまい、「震災や災害でどこからも食糧が来なかったら、地域の海や山河から食べられるものを得るしかないでしよう」というお話がリアルになってきました。

震災に限らずとも、流域圏や沿岸域、といった自然の仕組みのひとまとまりのなかで、水や食糧は地域循環型にしていくべきだとの議論もありますが、その際、地域にとっての海岸は、また別の意味をもって浮き上がってきたように思えます。

その地域の「風土」にあった。自然との暮らし方のヒントが、過去のお話には満載されています。それが語り手には意識されていないことも重要で、聞き手との相互作用で生まれてくる世界なのかもしれません。

一般化され、ある程度ふりいにかけられた情報で構成される歴史者に書き残された正史を書籍で読むのと異なり、
徒の個人史の世界は、聞き手との耳聞

によって湧きあがるように情報が出てくるところが面白いところです。

整頓づくりのアイディアは、確実に、
地域住民の記憶と感性のなかに存在し
ていると信じます。

貝殻類の小道

2003年夏、千葉県水更津の東京湾で残された蟹州千両を訪れたときのことです。直立堤防の外側には素晴らしい千両が広がっています。菰野の関を過ぎて浜に至る。漁業者や潮干狩りの人達によって踏み固められたと思われる小道が走っていました。その路頭が白く輝いているのです。よくよく見ると、細かく砕けた貝殻の殻ではありませんか！1潮が行ったのかかわかりませんが、真っ白な小道には貝殻が敷き詰められていたのです。



世界地圖式地圖

地元の家業のアサリ料理で調役になって駐車場にたずねていると、ききほどのおかみさんが、アサリの殻で調役の服をもって現れ、地面にばしゃっと捨てていきました。おやおやこれはどうしたのか、と不思議に思い、その周りを見るときには、点々と白い殻がありました。



結果として、 α と β の両方とも

もしや、これが売れどきの1と勘違いしてしまいました。駐車場はアスファルト舗装していないのですが、一面の砂けた瓦礫に覆われています。人や車に踏み固められて、沈下したりなどがあるのでしょうか、お客さんが食べた残りの煙が乾々と撒かれるわけですから、持続的に舗装され続けているようなものなのです。大分県中津市海で何った悪い出鱈目の世界は、まさにこれだったのです。

最近、千葉の浦安出身の写真家が「浦安の道は貝殻で白く光っていた」と書いているのも見出しました。

現在、貝殻は「廃棄物」になっていますが、もともとは海水中のカルシウムが固まったものでゴミにされるのはもったいないのです。自然の摂理に通った物質循環という点でもこういった使い方があったら、大地にまた還っていくのだと思います。また、浸透性も十分です。

望みづくりは、過去からヒントを得るだけでなく、それを現在の技術で河川の要素を再現していくという未来志向にもなりそうです。廃棄物処理もそうでしょうし、クリークなど海岸沿いの水環境や、生物による水質浄化など

も、現在であればより研究や技術開発が進んでいます。それを、過去の暮らしや風土に関する経験知の情報とつないだら、面白い世界が生まれるのは確かです。

地域の個性とは、何も、名所や名産品のシンボルだけではなく、生活のなかにセリトがあって、その語り手や情報源は地域住民なのです。訪問者とのセッションが肌直ぐりによって生まれそうですね。

地域の海岸の楽し方と現在の調査

では、具体的には、どのようなすずめの方が選ばれるのでしょうか？

前述の大部分県中津干潟では、海岸の計画を地域の方が主体的に地元の情勢をもとに作っていました。地域住民や関係する代表的な関係者、県と市の行政、技術者・研究者が参加する、懇談会が10回開催され、その間も協議や調査の場が多く持たれました。海岸行政は、事業を2000年休止した期間をフルに活用して、技術検討や設計の考え方に基づく海岸保全施設の設計のための測量や調査を土木技術のプロとして行いました。住民は、地域社会に

ってその砂浜は何なのかの調査や、砂浜や河口の生態系の生物調査を。ボランティアの研究者と共に徹底して行いました。その結果をわかりやすいイラスト図面にしたところ、情報やイメージの共有が進みました。生物リストのままだと、何が何だかわかりませんね。



大分県中津市立中津高等学校の環境教育図
(水辺に遊ぶ会提供)

また、懇談会のメンバーからはこの大新田海岸や周辺の海岸と生活に関する写真資料を提供していただきました。昔は白砂青松で干潟に連なる砂浜があり、地元の学校には潮道足が、この浜が子供の思い出の場所になっていること、この女の子が貝で懇談会の委員になりました。

また、過去の環境についてのヒアリングに応じてくださったおじいさん



中津大新田海岸での風景(水辺に遊ぶ会提供)



中津大新田海岸の風景(水辺に遊ぶ会提供)

は、自分の船を建造した時の記念写真を。顔からはずして持ってきてくださいました。干潟や浅海域での漁業を行う大型の帆掛け舟の打瀬船が河口港に停泊していました。また、漁師さんの家で昔の海の話をしていたら、じつと聞いていた調さんが、お菓子の店の中から古写真を取り出して見せてくださいました。海岸護岸が海干し場として活用され、赤ん坊を育てたお母さんも懸命に働いて、子供たちもお手伝いしたこと。冬には海岸の周辺には、黒い四角の海苔が干された光景があったので、街中の人も海を感じて育ったことなど、わくわくするような話がたくさん出てきます。

港町管理者からすれば、200mにも



満たない小さな海岸です。地元にとって残された砂浜、希少な生物の生息、といっても、最初はピンとこなかったと思います。従来は建設護岸が官民境界に設置して、べつちり砂浜の後の部分の埋め立て計画でした。しかし、計画変更の検討では、航空写真を活用してどのように海岸環境が移り変わってきたのかを調査したり、地域住民の詳しいお話を伺うなかで、現在の砂浜がもたらす地域にとっては



中津大新田海岸の風景(水辺に遊ぶ会提供)



中津大新田海岸の風景(水辺に遊ぶ会提供)

重要な海岸だったことがわかってきたのです。

昭和22(1947)年には、十分に植生が入っていません。より面積が広い砂浜が広がっており、塩田や物干し場となっていたようで、そこに植生が戦後に進められました。当時はこの砂浜が地域の活動の場でもあったので、背後地の集落から小道が浜に伸びています。現在は、草木がうっそうと茂っているなかで、けもの道があって不思議に思っていたのですが、実は、そこは、過去の道が埋もれていたのです。昭和60(1985)年には、河口に奥地深い浜が入っています。これは、河口の治水対策ということで埋めた砂を取ったり、地主さんが砂利採掘をしたりという活動の痕跡です。これまた発見で、現在は塩性湿地になっているラグーンは、もともとあった河口湿地を拡大した二次自然ともいえる空間だったのです。懇談会でお年寄りが、「人の手が入らなければとくに埋まっていた」とおっしゃっていたのは、このことだったのです。すると、現在ある生態系がどのような経緯で形成され、改

変から回復したのかの確定的な情報が得られたことになります。汽水域ビオトープのようなものです。そして、平成14(2002)年の現在私たちが見ている姿になっています。現在を理解するには、過去を知ることが大切。そのフィールドの自然特性を熟知することが、未来の設計につながります。

そして行く末の計画へ

これらの検討結果をもとに、今後の海岸保全施設の計画に参加者で公開のもと議論しました。その結果、海岸行政と地権者のご理解を得て、新しい考え方で海岸護岸の「引堤」計画が実現しました。背後の田畑や所有地への浸水や越流を防ぐという重要な点をおさへ、地域のきさやかな砂浜も大事な生態系も守られる計画となったのです。護岸の下敷きになった可能性のある砂浜は、自然のダイナミズムに曝されるので、当然、打撃が喰われます。しかし、もともと海岸というのはそういう呼吸をするような場所で、際なく侵食されていくものではなく、また、嵐の後に侵食されてもまた潮水期などに砂州が盛り上がり、全体として一定の範囲で変動するものなのです。

海岸法の改正時に、「砂浜も海岸保全施設」との位置づけがなされました。養魚などの人工の砂浜だけでなく、「自然の海岸も海岸保全施設」として評



大分県中津市立中津高等学校の環境教育図
(水辺に遊ぶ会提供)

価できないか?という発想で、この計画が検討されたともいえます。それは、干潟の奥に続く小規模な浜堤は、背後地の人達からは、砂で出来た防波堤のように大事にされてきたのですから、それを尊重できないかと。海岸の前面で強度優先の護岸で侵食を守るのではなく、自然地形の崩壊と背後のラグーンを「自然的防波の海岸保全施設」として考えたら、堤防を引くこともリアリティが出てきたのです。さらに、自然の海岸保全施設には、すでに植生があって、浜の底質や水質の浄化機能をもつのです。ついでに、そこに希少生物も住んでいた、ということになります。

引堤は、地球上の他の国の海岸で行われても、日本の海岸では社会的理由で無理だという説がずっとありました。それは、海岸の自然のダイナミズムを殺してしまいます。一方、近年の日本の海岸での人間生活や、国土保全は、ダイナミズムを容れずしないことを前提としてきました。それは陸の利用の点からはメリットもたくさんありましたが、一方で、大規模な台風などの災害には脆弱なエリアに人や資産が集中するという、災害リスクを増やすことにもなりました。

ここでご紹介した海岸の例は、特殊かもしれませんが。しかし、日本の海岸は、「自然」という切り口から、自然としての本来の姿や、画一的でなく地域を大切にする方向性へと移り変わっていくのではないのでしょうか? 黒川づくりのなかで、地域との対話地域特性や、もともとの地元の海岸との共生の知恵を環境や利用だけでなく、防災の点からいってもリスクが高い場所に関する具体情報があるのです。今までの構造物としての強度や施工速度を達成してきた標準技術の体系との出会いによって、きっと新しい日本の海岸での生活様式が生まれると思います。

里浜づくり

ビーチクリーンの精神と里浜づくり

クリーンアップ全国事務局 小島あずさ

ボランティアによる
ビーチクリーンアップ

全国の町で、古くから地域住民による美化清掃活動が活発に行われていました。町内会や子ども会などによる一斉清掃は、住宅街にとどまらず河川敷や海岸まで広く実施されています。多くの地域では、毎年恒例の地域行事として実施日も決まっており、回覧板などを通じて参加の呼びかけや確認が行われて、一軒から必ず一人以上は清掃に参加することが求められていたりします。

そういった努力があって、周辺地域の美観が保たれているわけですが、人々の暮らしの様式が変化し、それに伴って排出されるゴミの種類も変わってきている今、従来の清掃に頼るだけではゴミの処理がなくなるという危惧があります。

私たちは昔からいろいろなゴミを出してきましたが、消費スタイルの変化とともにゴミの中身も大きく変わってきました。大量生産から大量消費、そして大量廃棄にいたる暮らし方は、大量のゴミを生み出します。使えば使うほどゴミもまた増え、目先の利便性ばかりに気を取られているうちに、ふと気付くとゴミ問題が大きなしこ

かっていたというわけです。さらに、使い捨てにされているモノの多くは、自然には分解しないプラスチック製品がほとんどです。つまり、放っておけばそのままそこに残ってしまうゴミを、私たちはどんどん出しているということになります。日常生活においてゴミの減量が叫ばれ、リサイクルの推進が言われるようになって久しいですが、回収の経路からそれってしまった数億ゴミの対策はというと、昔と同じように住民やボランティアによる清掃活動に頼っているのが現状です。

ボランティアによる
ビーチクリーンアップ

都市近郊の海岸であれば、多くの人が訪れる分だけゴミも多く発生する一方で、海岸の美化やボランティア活動に対する意識も高く、それなりの対応がとられていることが多いようです。

しかし、日本の海岸は断崖絶壁の下にあるなど、船を使わなくては行くことができない場所が大変多いですし、小さな浜が数え切れないほどあるのです。どうしてもすべての海岸をきちんと清掃することは難しく、人の利用度の高い場所から優先的に掃除する、ということになってしまいます。



海岸のゴミは自然に分解されず残ります

比較的簡単にクリーンアップが行われているはずの地域でも、拾っても拾ってもまたゴミだらけ、という現実が繰り返され、それだけゴミが多いということの証なのでしょう。

私たちはこれまで13年間にわたって、ゴミを減らすだけでなく国際海岸クリーンアップを実施してきました。これは、世界中で一斉に展開される国際環境保護活動で、統一された様式で各海岸のゴミを調査しながらクリーンアップをしていく、というものです。

清掃だけでは根本的な解決にならないので、現状を把握しながら参加者自身にもゴミの実態を知ってもらう啓発活動という目的も持っています。

雨の多い日本では、大雨や台風通過のたびに、川底に溜まっていたゴミが流域各地から流れ出したゴミとともに下降し、最後は海辺に漂着します。海岸のゴミは海上や海辺で発生するのではなく、街で出た生活ゴミが水

に乗って流れてくる割合のほうが大きいこともわかっています。街中でゴミ捨てられるゴミばかりではなく、ちやんと捨てたつもりのももゴミ置き場や埋立地から風や水の流れてくることで流出してしまうこともあり、それらのゴミたちは川から海へと放れ、一部は海底に沈み、また海中を漂い、あるものは海岸に打ち上げられています。

膨大な量の人工ゴミは、清掃ボランティアの活動だけではとても回収できませんし、広大な海全体のゴミの総



海岸に打ち上げられたゴミは自然に分解されず残ります

量を想像すると、拾ってキレイにという段階をとうに過ぎていることがわかります。

社会貢献活動やボランティア活動への関心が高まり、海岸のクリーンアップ活動への参加も増えてきました。身近なところで気軽にできる活動として、クリーンアップは親しみやすいのしょう。ですが、「掃除」から一歩すすめて「地球規模の環境問題」として海辺のゴミに取り組んでいる立場からは、ちょっと物足りないなあと感じています。誰でもクリーンアップが終わって目の前の海岸からゴミが一掃されると、きれいになったなあと満足します。そのような達成感・充足感はとても大切なものですが、あえて「ちょっと待って、もう少し考えてください」と言いたいと思います。

「今はきれいになっているけれど、時間が経てばまたどこからかゴミが流れてくる。放置すれば、美化して細くなり、どんどん数が増えてしまう。ウミガメや海鳥、アザラシなどの動物た

ちにも、漁獲や釣りなどの多大な被害を与えてしまう。数億ゴミの問題は、出た物をどうするかよりも、出さないことが最も重要な対策である」ということを、私たちは活動を通じて参加者に伝えてきました。環境問題の解決には、「それがこととして実感し、自ら行動する」ことが肝要です。そのためには、理解で教えられるのではなく、体験を通じて実感することがいちばん印象に残り、その後の行動につながっていくと考えています。

監視、というまだ耳新しい言葉には、いろいろな期待がかけられると思います。海辺がごく身近な所であり、目の前に海が広がっている、人と海の間には不思議な関係がある現代、サーフィンを楽しむ人たちは、「波に乗る」ことを第一義とした生活のために仕事を犠牲にしたり、海辺の近くに住んだりします。彼らのような思い入れはなくても、海に行く心が安らぐのを感じる人は多いでしょう。だからこそ、貴重な休日を使って、離れたところからもビーチクリーンアップにたくさんの方が参加して下さるのだ、と思っています。母なる海は、遠くから思うだけのものではなく、実際に足を踏み、水と戯れて五感で味わって楽しめる場所です。

船舶からできることとして、多くの方が参加してくれるビーチクリーンアップが実現し、もう一歩環境への関心が高まったり、身近な海辺への親しみが深まったり、また海辺へ足を運ぶ人が増えることが、なによりの「里浜づくり」となるのだと思っています。

つくる、というのは何か形のあるものを新しく作成することとは異なります。体験や実感を通して、自分の心の中に何か生まれ、今まで気にとめていなかった何かの大切さに気付いたり、そのために何かしようと感じて行動に移したり、という一連のことが「つくる」、いくことなのだと思います。せっかく行くのなら、ゴミだらけの海岸よりもきれいな所の方が気持ちいい。そんなささやかな動機から、気軽なボランティア活動も環境保護もはじめられるのだと思っています。



海岸のゴミは自然に分解されず残ります



ゴミの多いビーチには、ゴミの回収が難しく、清掃員の手も足りません。

里浜づくり

里浜づくりは

三番瀬研究会代表 小笠原 一



三番瀬。写真はデータの宝庫

子どものころ「海に四方を囲まれ、緑豊かな国、日本」という書き出しの文章をよく目にした記憶があります。日本の海岸線距離は34,800kmと最近のデータを記憶しておりますが、この数字はどう変化してきたのだろうかと思いをめぐらします。

埋め立てによって海に海岸線が迫出したから減ったのか、あるいは埋め立てや埋立工事によって直線的な地形が海に出たから増えたのかとも思われ、リアス式海岸の侵食は増え、減かと思いはつきません。ここにあるのは同じ海岸線でも手付かずの海岸と、人工の海岸との詳細に区別された数値ではないから漠然とした増減が気になるのです。それぞれが生息している地域の海岸線を見比べていけば形状の変化とともに、心理的な海との距離も記録できていたのだと思います。里浜づくりのイメージがつかめるかどうかはここにあるのです。

里浜をつくるということの前に、居住する地域に海がないと思ひ込んでい

る人はこの三番瀬の狭い地帯である船橋市や市川市、習志野市にも多いし、埋立地がその多くを占める勝安寺でさえたくさんいらっしゃるようです。

海があることを知らず、というよりは海がない（海岸で囲まれたものを海とは思わないのです）。海がないところに海など存在しないと考えている住民がそこにいることを理解する必要があります。住民に海があることを知らせるには、海として海に触れられる環境を整えないと海があると認めてくれない——そんな日本になっていることを私たちから理解することが必要でした。

私たち三番瀬環境保全団体としての活動は16年目に入り、NPO三番瀬も3年目になりますが、その活動内容の多くは、海であることを知らせ、そこに生息する生物を知らせ、またその生物が江戸前と呼ばれる美味しい食物であることも知らせる活動であったと振り返ります。

その活動の軌跡を多くの方に見ていただき、三番瀬の未来を考えてもらえ



三番瀬博物館内所蔵の三番瀬の海産物

る施設が、7月22日に市川市立としてオープンしました。

「三番瀬博物館内所蔵」は京葉線市川塩浜駅の隣にあり、三番瀬の海岸線まで徒歩5分と至近に立地しています。

施設内には三番瀬の生物を入れた水槽がタッチプールとして置いてあり、訪れる家族連れに大変好評で、特に子どもたちは恐る恐るヤドカリやシロガヤ、ヒトデなどを手にし、大人たちはイシダイの幼魚の美しい遊泳に見とれています。それぞれに滞在時間が長く、案内役の私たちに嬉しい声掛けが……。このタッチプールは三番瀬の小さな海の役割をしていると考えています。見る者がその先に広がる海を想像でき、生き物たちの営みに思いをはせることができるということは、多くを海岸に



水槽の小さな海



市内所蔵。大学生が夢中です

置かれた三番瀬にとってはこの水槽も海の仕事をしていると考えています。

他にも、アマモのための水槽や、モニターの画面には私たちが行ったアマモの移植実験の現場の水中映像が流れています。また、たくさんの活動の資料が展示室を飾っています。活動の記録と現在進行形の保全の取り組みに関するものが中心になっています。

この施設が、三番瀬の保全再生のフィールドにおいての実践とその広報活動の場になっています。この水槽を前にすると多くの来場者は海洋で、自らの海の思い出を面々と語られ、この三番瀬がその思い出につながっていることを確認していらっしゃるようです。水槽は海になります。

海浜というのはこの都会においてはオアシスであり、思い出のある場所でもあり、この水槽の周りで語られる話こそが個々の思い出の証なのだと思います。それぞれの心と距離に近い里浜というのは都会では身近に見つからないのかもしれませんが、三番瀬には一つできたようです。

また、私たちは三番瀬の海上で大規模の目も、長瀬の日もそれぞれに可能な調査をしています。

潮の引く日は移植したアマモの経過をモニタリングし、潮のある日は潜水

で海域の生物調査をし、施設の水槽の管理用に海藻を採りにとかなかなに忙しく、つみづく地盤保全は現場だと実感しています。

大潮での4時間以上もかかる調査では、浅い海である三番瀬の大きな潮位差を計算に入れて取り掛からなければなりません。三番瀬の1,600haとその周辺海域を知り尽くしているつもりでも、風次第で大きな変化を見せ、浅瀬でスクリーを曲めることもあります。その瞬間に思うのは「三番瀬のルールに逆らった」ということです。

三番瀬の特別なルール、それは海としての畏敬と畏怖を以てしても人に届くものですが、最新の航行装置を以てしても、時には無力となります。これまで三番瀬に近づいたために得た知恵と記憶の数々を誰もが理解できるとは思えません——あまりにも多くの複合的な知識ですから。

しかし、この経験則を上手に利用してくれているのがNPOの若い後輩たちなのです。

その後輩たちが三番瀬をきもちと里浜として捉えて、街の再生と海域の保全に活かしていくことができる「これから」の提案をしてくれるでしょう。

私たちは三番瀬環境問題のまたある時代の実況を待機、マスコミに情報を

行政に協力を、商社に共存を、企業に活性のヒントを提供して、今三番瀬は保全を勝ち取りました。後輩たちがこれから目指すのは、まさに国と共に緑豊かな国を作り直すために協力を提案していくことです。

海の現場をデータという道にして前に進み、海に暮らす人に豊かな海を伝えます。データを物々交換して、海に市場が生まれます。その市場がNPOという存在なのではないかと考えます。

円滑に海と陸と山を結び、豊かさを演出し喜びを得ることに働くこと、それがNPO法人の理想であり、環境保全再生の最大の力なのでしょう。各地の海岸線でも多くの市場が生まれ、海が賑わうことを心から願います——四方を海に囲まれて里浜が映る緑豊かな国へ。

東京のアマモ場。環境保全も協力です



NPO三番瀬の運営会議

里浜づくり

海岸空間整備の計画にあたって

国土交通省国土利用政策研究部 空間研究部空間・ミナリ研究室長(美しい国土の創造)プロジェクトチーム事務局 上島 耕司 (Koji Ushima)

はじめに

本稿においては、里浜づくりのための海岸空間整備に係る計画において、

- ・海岸空間の「形」だけを整えるのではなく、地域の暮らしと海岸の繋がりを把握することが重要であること、
- ・従って、海岸空間整備のコンセプトとは「形」の選択ではなく、暮らし方の選択であること、
- ・その際に、住民と専門家の役割が重要であること、

地域の人々と海岸の繋がりの把握

従来、海岸と言えば、白砂青松かそうでなければニース、カンヌのような都市的海岸というように、背後地域と無関係な決まり切った規範(空間の目標像)に基づいた空間整備が行なわれてきた。しかし、里浜づくりにあたっては、それぞれの地域に合った海岸空間整備が必要であることはいまでもない。それでは、その地域にあった空間ということ、昔の海岸

(例えば、白砂青松)を復元しきえなければよいのであろうか。

本来、白砂青松は、防災機能を果たした空間であることは勿論、背後集落の人々が、松林の落ち葉や下草を払い、薪炭とするため、松を伐るといった生活・生産と密着した空間であった。また、その結果、松林のままで植物遷移が止まり、林床に日が照り、明るい歩きやすくレクリエーションにも適する空間ともなっていた。「白砂青松」とは、そのような海岸と地域の人々の関係・生活・生産・環境等の関係性(システム)の総称のことであった。

ところが、海岸といえば、白砂青松だけの空間整備になりかねない(少なくとも、その整備がきっかけになって、背後集落の人々が維持管理などに参加したり、利用が促されたりすること、地域の人々と海岸の間に新たな関係性が生まれることが必要であろう)。

すなわち、単に海岸空間の形がどうであるか、ということのみではなく、人々と海岸の関係性がどのようなものであったか、どのようなものになるか

が重要なのである。

写真-1、2をご覧いただきたい。海岸線にそって、一見、どちらも同じような町並みである。しかし、背後地域の空間の歴史(歴史)を見ると随分異なることが分かる。

図-1、2のように、写真-1のあたりは内海、埋地であったものが、近世において新田開発され、戦後、公共施設用地や住宅地としての開発が行われた場所である。従って、写真-1付近は、古くから内陸にあった集落(中心市地)にとっては、郊外の位置づけであり、その集落の人々にとっての利用も認識も郊外的なものであったと思われる。一方、写真-2付近は、古くからの漁村であった場所である。背後に少し入ると、写真-3のように、漁村などの水辺を側面利用する集落に特徴的な水辺線に垂直な路地が発達しているのが見受けられる。ここでは、人々が、埋め立てられた前浜の代わりに、夕涼みをしている姿を見ることが出来る。

さて、このような地区の前面に海岸空間整備が行われる場合には、それぞれの海岸空間における人々と海岸の関係性(人々が海岸とどのように付きあ



図-1 海岸と背後地域の空間関係



図-2 図-1の明治10年代の状況

(図-1、2とも横濱市史資料)

っているか)に配慮して、空間整備のコンセプトを設定することが必要となる。

空間整備のコンセプトの設定のために

空間整備のコンセプトの設定のためには、前述のように海岸空間の歴史を調べることで、過去に何があったという「空間の形」だけでなく、過去から現在までの人々と海岸との繋がりを丹念に抽出し、何が失われてしまったか、どのように変容したか、といった地域の人々と海岸との繋がりの実態を把握することが必要である。

人々と海岸の繋がりを調べる方法としては、丹念な現地調査、ヒヤリング、旧版地図や地誌などによる分析がある。

なお、過去における海岸と人々のつながりがどうであったかを把握する際には、直背後と海岸だけでなく、内陸と海岸との関係にも留意する必要がある。例えば、「雨下り」という行事は、神輿が海岸や海中に渡渉するものであるが、かなり内陸の神社で行われることもある。埋め立てによって海岸の形が変化した後でも、その繋りのルートは内陸と海岸の集落の深い関係を示すことも多い。

さて、地域の人々と海岸との繋がりの実態を把握した後には、当該地域における人々と海岸との関係において、守るべき大事なものは何か、について検討し、今後の地域の人々と海岸の関係性、すなわち、空間整備のコンセプトを設定することが必要である。従って、空間整備のコンセプトの設定とは、形の選択ではなく「地域の人々の暮らし方」の選択である。「形」だけを取り上げても、本来、そこには要素はない。多くの場合、表面的で不毛な議論に終わることが多い。また、前述のように、形だけで、人々と海岸の繋がりとは何の関係もない「飾り」だけの整備に終わることもない。

里浜づくりに関して、過去にあった人々と海岸のつながりを復元することを優先するか、新たな海岸との関係を構築するか、予め、決まった答えがあるわけではなく、その地域ごとに、住民、行政、専門家等の関係者が協議して、決めてゆく事柄であろう。

さて、以上のような里浜づくりのための空間整備に係る計画の流れにおける住民参加及び専門家の役割について一言述べておきたい。

本稿の文脈における専門家の役割とは、住民も気づいていないかもしれな

い、忘れてしまったかもしれない人々と海岸との繋がりと空間の関係性を抽出することに他ならない。

一方、それは、住民自らが取り出すべきものでもある。パースや絵を見せてどれがよいかを問うような住民参加も見られるが、本稿の文脈における住民参加とは、地域の潜在的価値を不断に発掘、発見するために行われるものということになろう。その目的とところは、専門家からのアプローチと同じものであると言えよう。

写真-1 海岸線の町並み(写真は宅地の拡張)



写真-2 海岸線の町並み(古くからの漁村集落の歴史)



写真-3 昔の水辺線に垂直な路地(古くからの集落の内部。写真はいずれも横濱市史資料)



【参考文献】

- 1) 三谷正人、上島耕司「海岸とパブリックアクセス整備」『海岸空間の機能と整備の方向性』、国土交通省「海岸の管理」、国土交通省、2001.11、2002.2
- 2) 上島耕司、豊田和弘、斎藤和弘「都市と一体となった水辺空間の機能整理とデザイン」、『都市計画』No.940、1999.7
- 3) 斎藤和弘、上島耕司「海岸空間とアースデザイン」、『国土交通』、2001.12
- 4) 上島耕司、市村高子「臨海部における空間整備の課題及び評価の体系化に関する研究—里浜づくりの歴史及び計画手法の確立を目指して—」、『都市計画』No.97、2003.6

里浜づくりの 促進に向けた取り組み

① 基本的な考え方

これまで海岸行政は、津波・高潮などに対する海岸防災に重点を置き、ものづくり中心に進めてきました。津波、高潮や波浪などによる海岸災害の防止、軽減が大きな行政目標だったからであり、今後とも引き続き、所要の施設整備を鋭意進めていく必要があります。

一方、里浜づくりは、地域の人たちが主体となって地域の人たちと海辺とのつながりを高揚化させるための運動や様々な取り組みのことで、したがって、従前のものづくり主体の海辺づくりとは異なり、地域住民、行政、学識経験者の密接な連携のもと、地域固有の自然を見つめ、歴史をひも

ときながら、海辺と地域の人々との固有のつながりのビジョンを明確化することがまず大切です。

その上で、目指すビジョンの実現に向けて、ソフト、ハード両面の各種の取り組みを行うこととなります。

また、港湾海岸における里浜づくりについては、みなとまちづくりとの密接な連携が必要です。海辺は、賑わいのあるみなとまちの実現に向け、レクリエーションを軸とした各種活動の場として重要な役割を担うものだからです。

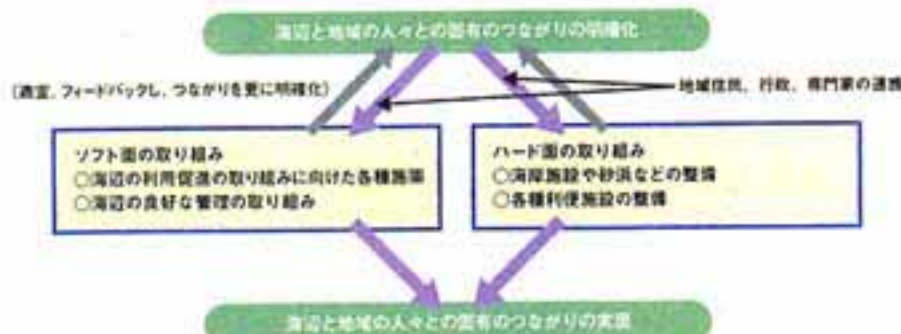
ソフト面の取り組みとしては、海辺の利用促進と適正な管理に向けて、例

えば、ビーチスポーツの振興、海岸清掃の徹底などの取り組みを、地域が主体となって進めていくことが必要です。海岸行政においても、地域の方々等と連携して、海辺の適正な利用と環境保全に資するよう、地域の取り組みに対する所要の支援を今後検討していく必要があると考えています。

また、ハード面の取り組みとしては、海岸施設、砂浜、各種利便施設など、所要の施設整備を進めていくことが必要となります。海岸行政においても、これら地域からの要望を的確に受け止めて、海岸保全施設の整備などにより所要の支援を行っていきたく考えています。



<里浜づくりの推進に向けた取り組み>



ただし、ハード面の整備は、里浜づくりの手段の一つに過ぎず、海辺と地域の人々との固有の密接なつながりの構築に向けて、ソフト面、ハード面一体となった総合的な取り組みが重要です。

② 今年度の取り組み

今年度の取り組みとしては、第一に、里浜づくりの普及・啓発活動として、パンフレットの作成、雑誌での紹介、ホームページの開設などに取り組んでいます。

また、本誌には、今後「里浜づくり

取り組み状況を紹介する予定です。

第二に、今年度、里浜づくり研究会において、里浜づくりに取り組む方たちの考え、行動する糸口になる資料として、里浜づくりの「着眼点」(みちしるべ) (版権)を取りまとめる予定です。

既に各地で里浜づくりの趣旨に合った海辺づくりがなされつつあります。また、河川づくりやまちづくりなどにおいて、目指すべき里浜づくりに十分参考になる事例も見受けられます。これらをできるだけ多く丹念にレビュー

しつつ、地域の状況、行政関係者などに活用していただける資料を作成したいと考えています。

里浜づくりは、地域の人たちが主役です。

是非、自分たちの海辺について、このような人々とのつながりを実現したい。このような利用をして地域固有の文化の継承や地域振興に役立てたい、といった声や要望を、気軽に県や国の行政機関に届けてください。それが夢の実現に向けた第一歩です。



コーナー」を設け、定期的に各地での

